

—スタッフ—

| 役 職 | スタッフ名 |
|-------|--------|
| 部 長 | 烏野 隆博 |
| 科 長 | 福島 健太郎 |
| 医 長 | 佐多 弘 |
| 診療局参与 | 玉置 俊治 |
| 非常勤医師 | 一井 倫子 |

—概要—

当院は日本血液学会認定血液研修施設であり、これまでに造血幹細胞移植療法を含め、積極的に治癒を目指した治療を行ってきた。自己末梢血幹細胞移植、血縁者間造血幹細胞移植の他、日本臍帯血バンクおよび日本骨髄バンクを介した造血幹細胞移植が施行可能な認定施設であり、1991年から2009年までに施行したすべての移植患者数は319名である。しかし2009年以降、常勤医師は玉置俊治医師(診療局参与)1名となったため移植医療を休止していたが、2014年度より福島科長、2015年度から烏野部長、佐多医長が着任し移植医療を再開した。自己末梢血幹細胞移植はもとより4例の血縁者間造血幹細胞移植を施行し、移植医療を再開することができた。さらに骨髄バンクからの非血縁者間造血幹細胞移植が施行可能となるための再申請を行った。これら治療レベルアップのみならず、泉州二次医療圏内における血液疾患に対する医療レベルアップ・二次医療圏内での治療の完結を目標に、造血幹細胞治療における他病院との連携システムを構築した。

このように治癒を目指した積極的治療に関しては拡充してきた一方で、これら以外の生活の質を重視した化学療法や輸血療法など患者さんの満足度を重視した、患者さんの状況に応じた診療を行った。

(診療体制)

外来診療は玉置診療局参与、大阪大学総合地域医療学寄附講座所属の一井医師を加えた5名で担当し、地域の医療機関よりの紹介患者の診療や外来化学療法、輸血療法など多くの患者さんの診療にあたった。医療体制および診療体制が整ったことで紹介患者も増加し、2014年度は185件であったが2015年度は308件となった。この他、他科からの化学療法の合併症等に関するコンサルトにも随時対応した。

入院診療は、患者数の増加に伴い昨年度より3床の増床となり18床を烏野部長・福島科長・佐多医長で担当した。

入院患者数も昨年と比較すると増加しており、延べ260件(実数:158名)となった。さらに臨床研修医の教育にも力を入れ、初期研修医:2名に指導を行った。

今年度は肺腫瘍内科の一時休診の時期に、外来・入院を含めその診療のサポートを行った。

—実績—

2015年4月～2016年3月の入院患者

(各疾患実患者数):148名(除:肺がん患者;10名)

| 悪性リンパ腫、形質細胞性疾患 | |
|---------------------|----|
| びまん性大細胞型B細胞性リンパ腫 | 28 |
| ろ溶性リンパ腫 | 8 |
| 成人T細胞性白血病/リンパ腫 | 4 |
| ホジキンリンパ腫 | 2 |
| その他の悪性リンパ腫 | 10 |
| 多発性骨髄腫 | 10 |
| 急性白血病とその類縁疾患 | |
| 急性骨髄性白血病 | 14 |
| 急性リンパ性白血病 | 3 |
| 慢性骨髄性白血病 | 7 |
| 慢性リンパ性白血病・その他 | 1 |
| 骨髄異形成症候群 | 17 |
| 良性疾患、その他の疾患 | |
| 特発性血小板減少性紫斑病 | 15 |
| 再生不良性貧血 | 6 |
| その他(血栓性血小板減少性紫斑病など) | 23 |

—今年度の成果と反省点—

血縁者間造血幹細胞移植を再開し、さらに非血縁者間造血幹細胞移植に向け認定施設の再申請することができたことは大きな成果と考える。一方で人員が十分確保できなかったことは反省すべき点である。

—来年度への抱負—

1. 非血縁者間造血幹細胞移植・臍帯血移植の施行
2. 人員の確保および病床の増床
3. 在院日数の短縮